

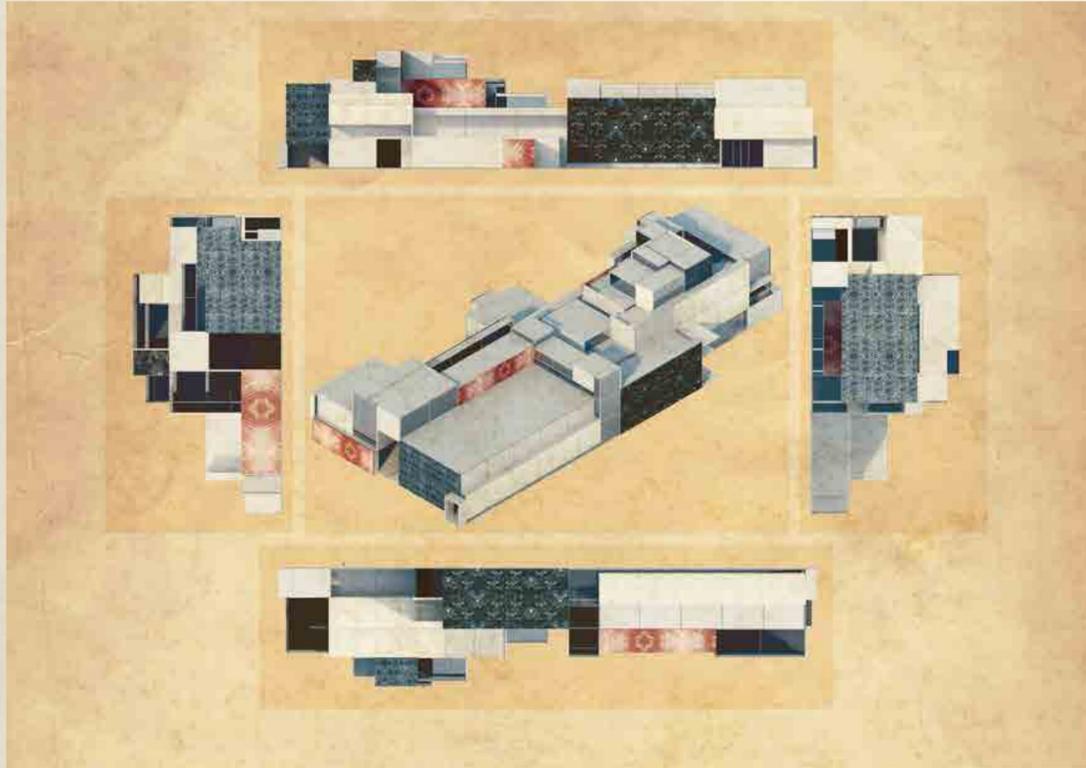


**DeStijl Museum -Barcelona Pavilion model-**  
Theo van Doesburg / Mies van der Rohe

# 追考 バルセロナ・パヴィリオン

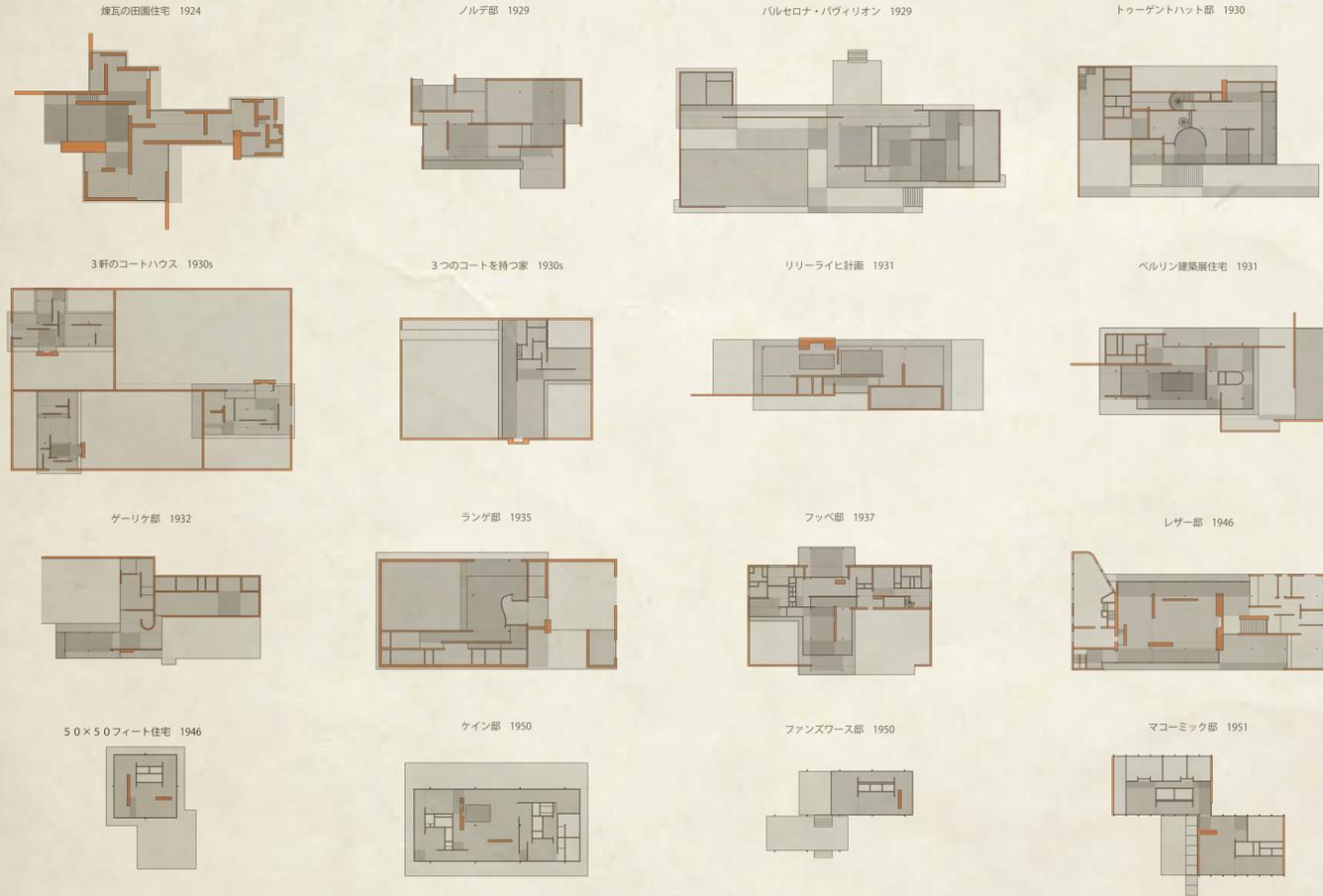
## ーミース・ファン・デル・ローエの領域に基づく空間分析とデ・スティール絵画の空間化を通じてー

1929年ミース・ファン・デル・ローエによって設計されたバルセロナ・パヴィリオン。  
本研究・設計は、このモダニズムの金字塔であるバルセロナ・パヴィリオンの知られざる姿を浮かび上がらせるための試行実験である。  
ミースの建築を領域という観点で分析し、同時期の芸術運動デ・スティールとの接点を探る事で、ミースがフラットな空間に閉じ込めた、内なるバルセロナ・パヴィリオンが顕れる。



### ミース作品における領域のヴォリューム化

ドゥースブルフ作品におけるヴォリュームの領域化および領域のヴォリューム化のプロセスをもとに、ミース作品の領域のヴォリューム化を行う。領域の重複数に応じて、ヴォリュームの高さを、3m・6m・9m・12m・15mと設定しヴォリューム化する。



### ミース作品における領域分析



バルセロナパヴィリオン内観写真

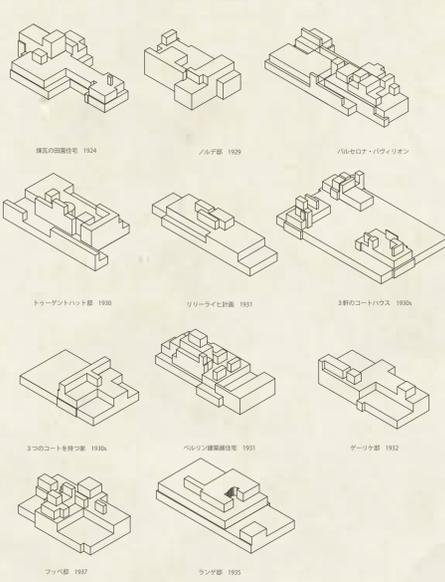
分析  
分析方法  
先の仮説より、ミースの作品を①『壁』によりどのように空間が構成されているのか②『壁』によりつくられる『領域』がどのように全体を構成しているのか、の2点がどのように関連しているかを分析・考察していく。

対象作品  
ミースの実作品から未完のプロジェクトに至るまで、この『壁』による領域形成に基づく空間構成法の顕著でありそうなものを(独立住宅や小規模、平屋を中心とする) 研究対象とする。  
[The Mies van der Rohe Archive] を主な資料としてこれと他の文献に掲載されている『壁』による領域形成に基づく空間構成法の見出し得る作品を網羅的に検証分析するものとする。

No	作品名	年代
1	ノルデ部	1929
2	トゥーゲントハット部	1930
3	ミース部	1932
4	ゲーリケ部	1932
5	レムケ部	1930s
6	ガレージのあるコートハウス	1930s
7	3軒のコートハウス	1930s
8	3つのコートをもつ家	1930s
9	ランゲ部	1935
10	フッベ部	1937
11	レザー部	1946
12	カンター部	1946
13	ファンズワース部	1950
14	ケイン部	1950
15	50×50フィート住宅	1950
16	マコーミック部	1951
17	モリス・グリーンウォールド部	1951

No	作品名	年代
1	ガラスの部屋	1931
2	リレーライヒ計画	1931
3	ベルリン建築家住宅	1931
4	バルセロナ・パヴィリオン	1929
5	小都市の美術館	1943
6	シカゴアートクラブ	1948
7	ロウハウス	1950

### ミース作品における領域のヴォリュームモデル

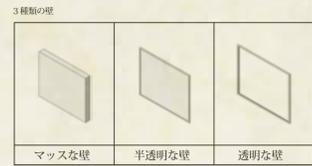


### ドゥースブルフ絵画作品のヴォリューム化

最後に、先のドゥースブルフの建築作品(3次元)の領域化(2次元化)のプロセスと逆の方法で、ドゥースブルフの絵画作品(2次元化)のをヴォリューム化(3次元化)を行う。ドゥースブルフの絵画作品を1/6のサイズにスケールダウンしグレースケールに変換する。その時の黒(K)の濃度に応じて、ヴォリュームの高さを10mmから100mmと設定しヴォリューム化する。Kの値は四捨五入するものとし、カンパス地の色は無いもの(K=0%)とする。



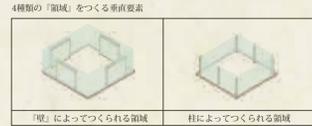
『壁』について  
ここでは『壁』を、マッスの壁・不透明なガラス壁・透明なガラス壁の3種類の垂直面と定義する。  
P.アイゼンマンの言うように透明な壁としてガラス面をマッスな壁と同様に考える事で(壁のヒエラルキーを無くす事で)より純粋な構成法を見出す事ができると考えるからである。



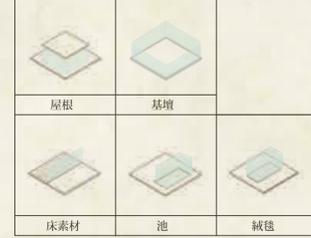
『領域』について  
ここでは『領域』を、四辺に面としての境界が現れる、平面的にみた最小限の矩形として考える。(例外としてトゥーゲントハット部の半円形の壁などの曲面)  
またここでは完全に『壁』に囲われる状態ではなくとも、『壁』によって構成される『領域』と定義する。  
空間を最小限の矩形の『領域』に分解する事により、それらが全体でどのように構成されているか(重複性や連続性)を見出す事ができると考えるからである。  
以下は本論の定義する『領域』の凡例を示すものである。



『領域』をつくる垂直要素  
ここでは『領域』をつくる垂直要素を、上記の『壁』(マッスの壁・不透明なガラス壁・透明なガラス壁)・柱の4種類と定義する。  
ここで着目したいのは各垂直要素に可視性、不可視性が存在することである。

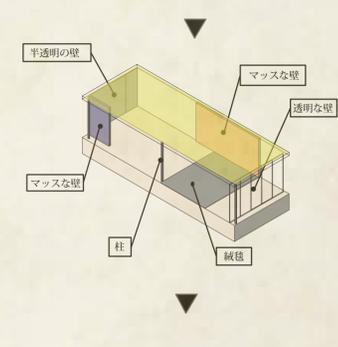
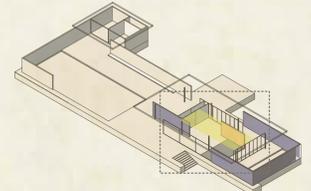


『領域』をつくる水平要素  
ここでは『領域』をつくる水平要素を、屋根・基礎・床素材の差異・池・絨毯の5種類と定義する。



バルセロナ・パヴィリオン分析例  
ミースの作品を『壁』による『領域』に分解し、その『領域』がどのように構成されているかをパターンとして抽出する。  
またその『領域』が全体でどのように構成されているかを見出す事ができれば、『壁』による構成法としてミースの作品を見出し評価することが仮説的にはあるが、可能だと考える。  
以下はバルセロナパヴィリオンでの分析の一例を示すものである。

このように『領域』によって分解し、そのパターンを見出す  
ここでは下図中の黄色の領域を対象とする。

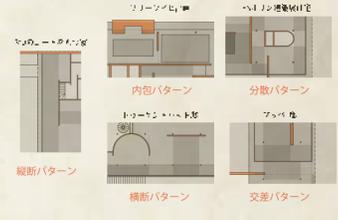


次に『領域』が全体でどのように関係し構成されているかを分析する。



全ての『領域』を合わせ『領域』のパターンが確定される。

分析結果・仮説的考察  
分析結果  
以上の分析により、『領域』の構成のパターンを見出した。



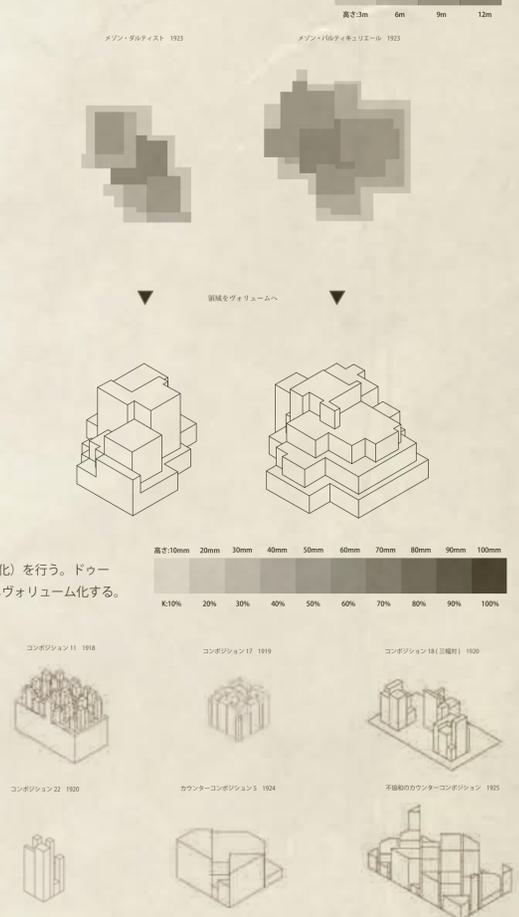
仮説的考察  
以上の分析結果を踏まえ、ミースの設計意図・設計手法は、『壁』による『領域』の重なりによって、シンプルな要素のみで、その複雑さを生み出していると考えられた。  
領域の重複の多い濃度の濃い部分は、他の領域から受ける影響のより強い場所であり同時に、様々な領域と連続する、方向性を多く持った場所であるといえる。また濃度の薄い部分は、他の領域から受ける影響は弱い場所であるといえる。

バルセロナ・パヴィリオンでの複雑で流動的な空間体験は、この『壁』による『領域』の重層的な構成、つまり濃度の濃い部分が重複や分散し、その場所に流れるように導かれ、濃度の薄い部分その構成のリズムをより明快に生み出していたのではないかと考えられる。  
ここにミースの数少ない要素で複雑で流動的な空間性の設計手法『壁』による領域形成に基づく空間構成法の一側面を見出すことができた。  
さらに、横断的な分析により領域の重複のパターンが時代を経て変遷していることが見出された。初期は離散的に領域が重複し、それがだんだんと横断的に重複していく。そしてアメリカに渡る1940年を境にその領域ミース結核

本修正設計は建築家ミース・ファン・デル・ローエの設計した建築空間を分析し、ミースの設計手法を明らかにすること、ないしミースのこれまでの建築空間を、現代において再評価・再定義することを主旨とする。またそこから得られる新しい知見を今後の自身設計活動の一助とする事を目的とする。ミースの空間性は「ユニバーサル・スペース」の言葉に表現されるように、フラットで何も無い、シンプルな空間性であるという評価が一般的である。しかし、その反面で、多くの建築家や建築史家がミースの空間性を、複雑性・流動性・領域の多層性というように論じている。その背景をもとに、本研究ではミースの壁による領域形成に着目し、その重複による空間構成法を見出すものとする。またその結果として得られる空間構成法をもとに、改めてのミース解釈をして終結とする。またそこから得られたミース解釈に基づき、テオ・ファン・ドゥースブルフとデ・スティールとの関連性を読み取り、そのプロセスの類似性を比較分析しながら、試行実験的な建築設計とする。最終的な設計は、バルセロナ・パヴィリオンをその基本モデルとし、分析による領域の重複をもとに、デ・スティール的に立体化したバルセロナ・パヴィリオンを設計した。内部空間の様々な領域の移り変わりや、それに伴うプログラムの変化に富んだ複雑でありながら、シンプルな形の建築を設計する事が出来た。

### ドゥースブルフ建築作品における領域のヴォリューム化

先のドゥースブルフ建築作品におけるヴォリュームの領域化をもとに、ドゥースブルフの建築作品の領域のヴォリューム化を行う。模型から仮定し、1層分の高さを3mとし、領域の重複数に応じて、ヴォリュームの高さを、3m・6m・9m・12mと設定しヴォリューム化する。



計画敷地

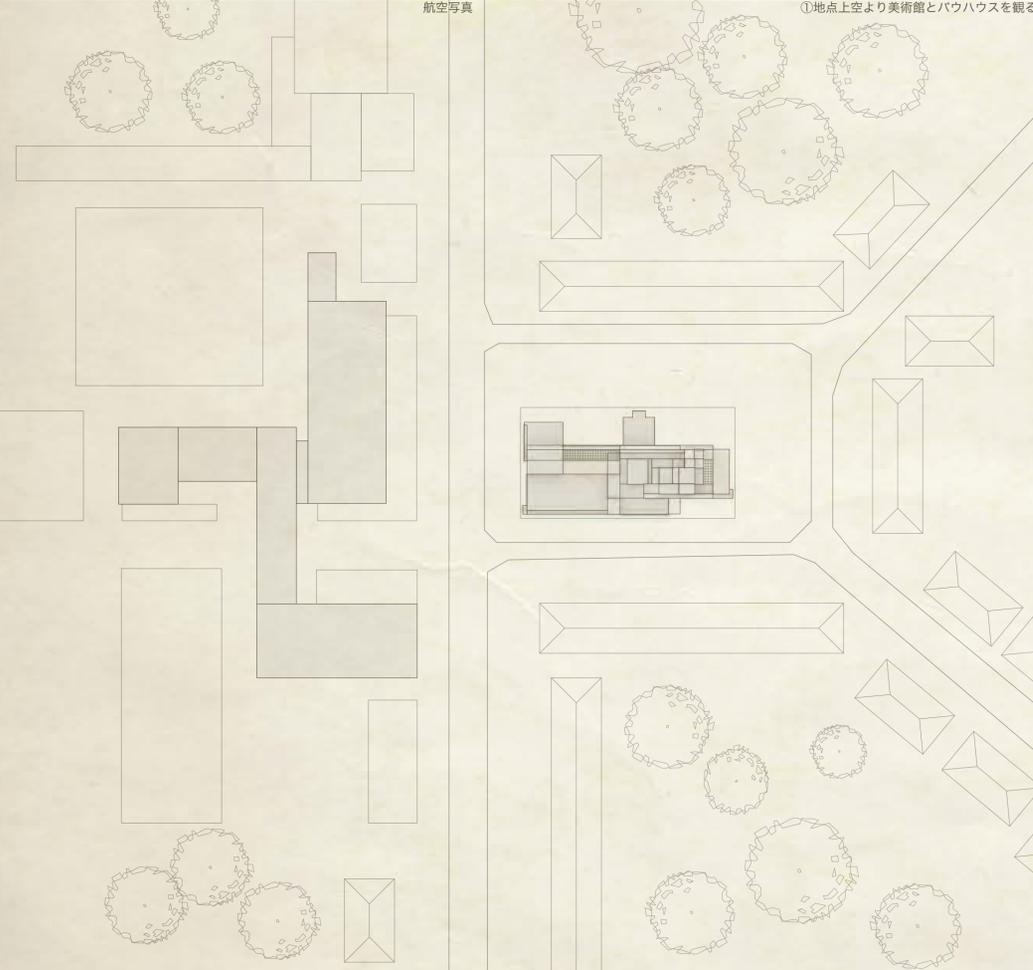
本設計では、ミースとドゥースブルフに敬意を表し、2人の接点となった場所、ドイツ、パウハウス・テッサウ校の西側広場にデザイン美術館を計画する。



航空写真

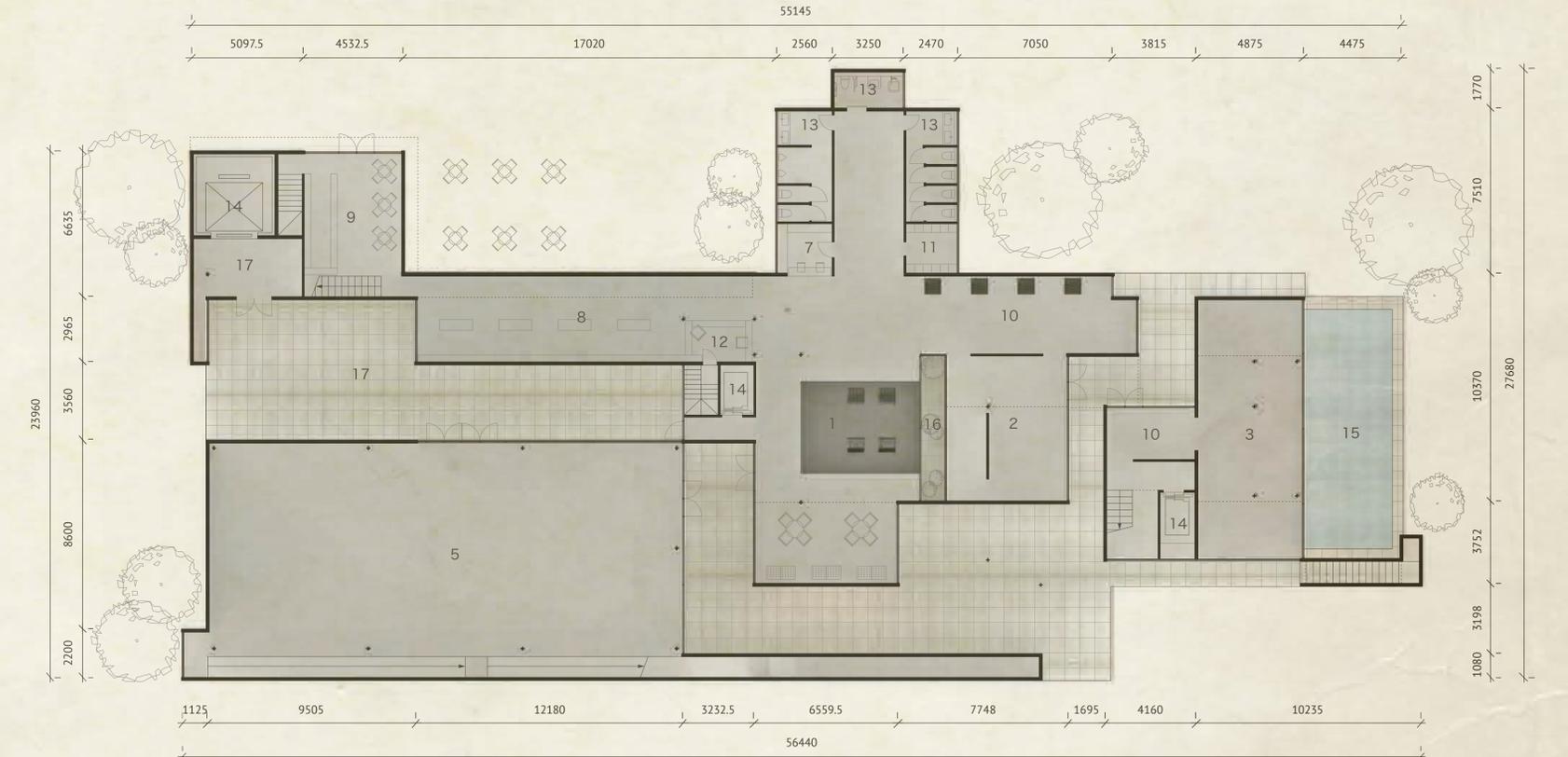


①地点上空より美術館とパウハウスを観る

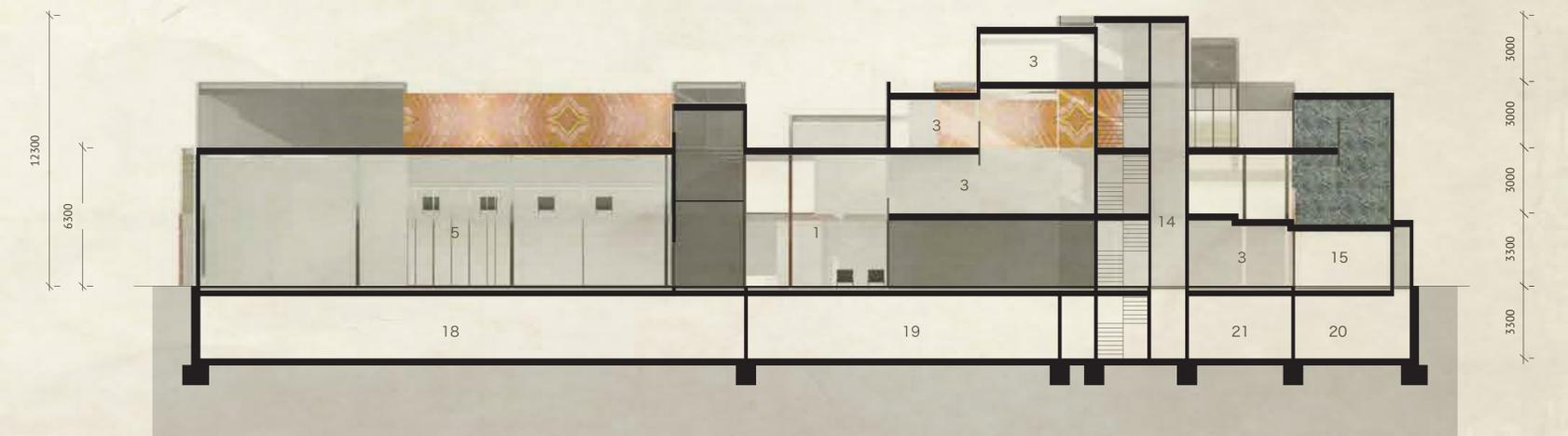


配置平面図 S=1/1000

平面図・断面図 S=1/150



1階平面図



- 1. エントランスホール
- 2. エントランスギャラリー
- 3. 絵画ギャラリー
- 4. 彫刻ギャラリー
- 5. 特設・企画ギャラリー
- 6. 屋外ギャラリー
- 7. チケットオフィス
- 8. ミュージアムショップ
- 9. カフェ
- 10. ホワイエ
- 11. クローク
- 12. オフィス
- 13. トイレ
- 14. エレベーター
- 15. 水盤
- 16. 光庭
- 17. 搬入スペース
- 18. 作品保管庫
- 19. 作品補修室
- 20. 設備・機械室
- 21. バックヤード

C-C 断面図

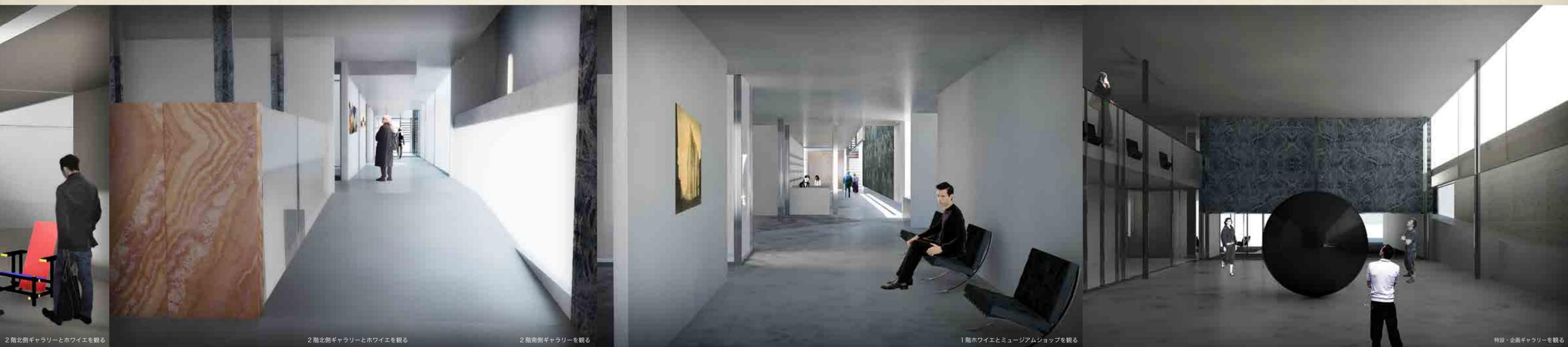
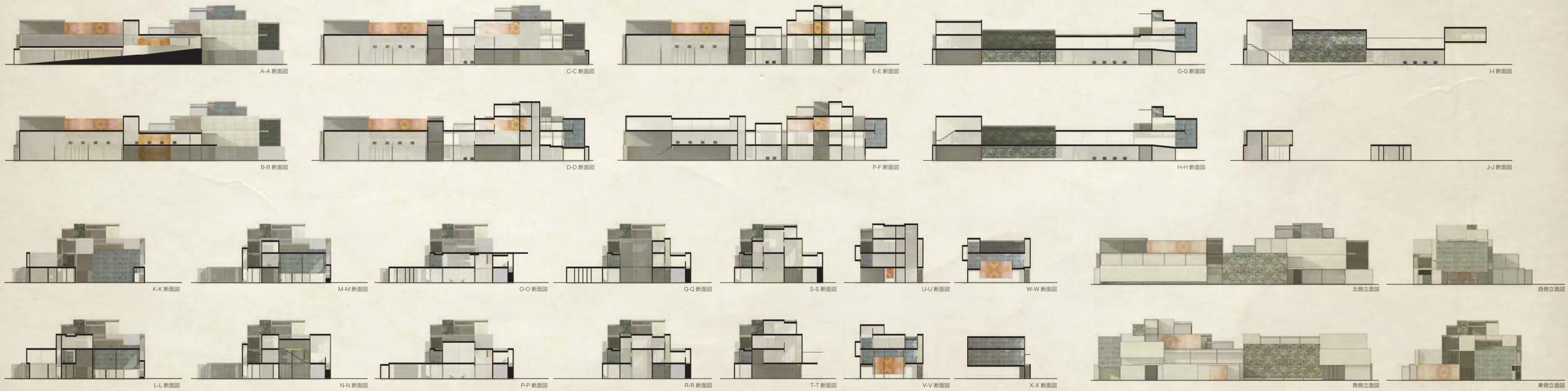
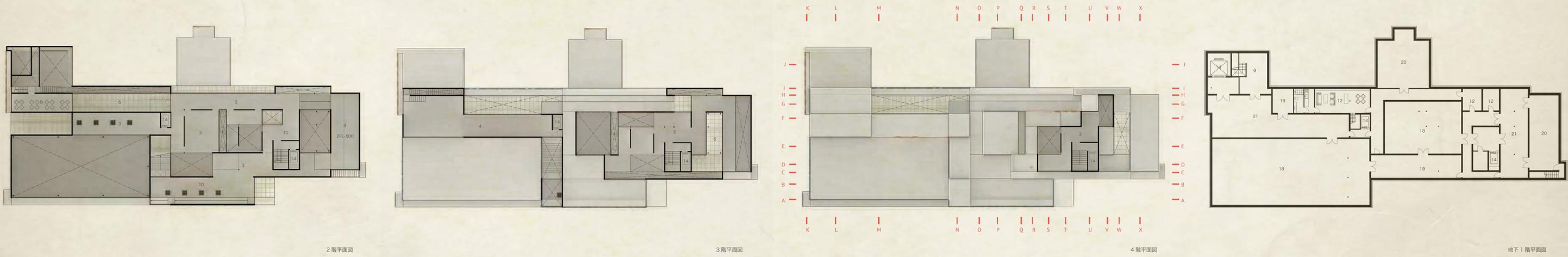


②地点より本計画建物を観る



③地点より本計画建物を観る





2階北側ギャラリーとホワイエを観る

2階北側ギャラリーとホワイエを観る

2階南側ギャラリーを観る

1階ホワイエとミュージアムショップを観る

特設・企画ギャラリーを観る